

# 「森銑三刈谷の会」だより No. 7

発行 2022年4月16日（月刊・メールでの投稿歓迎）  
例会 第3土曜日 14:00-16:00 市中央図書館 参加自由

バックナンバー 刈谷市中央図書館>森銑三刈谷の会  
共同代表 神谷磨利子・鈴木 哲 tetsu\_s@katch.ne.jp



市立名古屋図書館（現名古屋市鶴舞図書館）初代館長・阪谷俊作（1892-1977）。洪沢栄一・ちよの次女・琴子の次男。1922-48年同図書館館長。森銑三（1895-1985）も開館当初1923-25年、同館に奉職した。〈写真『白梅学園短期大学紀要』13（1977）〉

## 第7回（2022/3/19）鈴木哲「森銑三と洪沢栄一の孫阪谷俊作：市立名古屋図書館がつかない縁」16人

森（1975;1990）『思ひ出すことども』中央公論社に市立名古屋図書館（現名古屋市鶴舞中央図書館）初代館長阪谷俊作（1892-1977）の言及があり、「阪谷館長は二度までも、私の人生に於ての方向転換をさせてくださった」とある。文部省図書館講習所入学推薦[1925]と目白・蓬左文庫職紹介[1938]である。名古屋図書館在職時と東京出張の阪谷との上野での偶然の出会いによる。（森, 1990, pp. 99-101）

阪谷は1922-48年図書館館長、銑三は1923/4-25/3奉職で、阪谷はお伽ばなしの会に尽力（名古屋市, 1974, p. 122）、銑三はお伽ばなしの会を開催（高梨, 2015）した。弟三郎が訪れている（森, 1986）。

大河ドラマ（2021）「青天を衝け」で阪谷が洪沢栄一（1840-1931）の孫であることを知った。阪谷は阪谷芳郎（東京市長）と（洪沢）琴子の次男で、芳郎は阪谷朗廬（備中郷校興譲館館長）の4男、琴子は洪沢栄一・ちよの次女である。俊作は銑三・萩原恭平共訳（1926）『小泉八雲選集』や『森銑三著作集』（1971-74）、『思ひ出す一』を目にしたであろう。

吉川芳秋（1977）「初代市立名古屋図書館長・郷土文化会創設者阪谷俊作先生逝去」名古屋郷土文化会『郷土文化』32（1）と吉川（1985）「市立名古屋図書館に勤め、遂に天下の人物史通となった森銑三翁」同40（1）がある。年譜「森銑三と洪沢栄一の孫阪谷俊作」を資料として配付した。（哲）

## ジグザグの道程にある伏線

兵藤吾津夫

さりげなく散りばめられた伏線を回収して大団円に至るのがミステリーの醍醐味ですが、「森銑三ヒストリー」の場合は、正編13巻、続編17巻の著作集が一つの到達点であることをすでに私たちは知っていますので、その道程にあるいくつかの伏線を発見して明らかにすることが、「森銑三刈谷の会」の楽しみといえるのではないのでしょうか。

3月19日の例会では、銑三さんが30歳の頃に勤めていた市立名古屋図書館の館長が洪沢栄一氏の孫の阪谷俊作氏であり、その俊作氏の推薦で文部省図書館講習所で学び、俊作氏の推薦で蓬左文庫に就職が決まったことが明らかになりました。

そして、また一つ。銑三さんは名古屋図書館に勤めていた頃、地元紙「新愛知」に「偉人暦」（当日命日の人物）を連載していましたが、この原稿を採用したのが反骨のジャーナリスト桐生悠々であったことを、私は初めて知りました。

銑三さんの道のりは決して平坦ではなく、むしろジグザグに過ぎるのですが、そのジグザグの襲々に多くの人との出会いがあり、銑三さんならではのエピソードがひそんでいます。銑三ヒストリーがますます面白くなってきました。

## バックナンバー・今後予定

バックナンバーは図書館 HP「森銑三刈谷の会」でお読みいただけます。

- 2022/4/16（土）飯田「鷹見泉石像と渡邊崋山」
- 2022/5/21（土）神谷「宍戸俊治先生と森銑三」
- 2022/6/18（土）神谷「森銑三の服装と人柄」
- 2022/7/16（土）「森銑三『愛知県三河の七夕』を読む+正木敦子「起こし絵」解説

お知らせ 神谷（2022）「森銑三・三郎の叔父と日露戦争」刈谷市郷土文化研究会『かりや』43:73-82 □